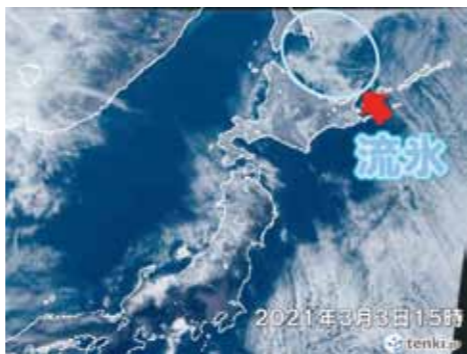


気象と天気の話 **冬北海道の冬の風物詩「流氷」**

最も寒い時期の1月後半から4月ごろにかけては、例年ですと北海道のオホーツク海側で流氷を見ることができます。流氷はシベリアの沿岸付近で氷が発生し、寒さが増すとともに氷の面積が広がり、徐々に南へと進んできます。最盛期には北海道の10倍以上の大きさになる年もあります。オホーツク海は北半球では流氷が存在するもっとも南の海域とされています。オホーツク海が氷に覆われる光景は、圧巻であり、氷を砕いて進む砕氷船のクルーズなどは、一度は体験したいところです。そんな美しい光景を見せる流氷ですが、別の一面も持ち合わせています。氷に覆われた海面は太陽の光を反射し、海から蒸発する水が減り、雲の発生が妨げられます。太陽の光を反射すると地面を温めることができず、雲の発生が少ないと放射冷却がより強まります。そのため、もともと厳しい寒さの冬の北海道はさらに寒くなります。この現象は、オホーツク海に面している地域だけでなく、札幌などがある道央や道南でも影響を受けると言われています。現在気象庁では、流氷の観測を「稚内」「網走」「釧路」で行っています。視界外の海域から流れてきた流氷が、初めて見られた日の「流氷初日」や流氷が接岸、または定着氷と接着して沿岸水路がなくなり、船舶が航行できなくなった最初の日の「接岸初日」などの発表を行っています。統計の残っている1946年以降の記

録によると、近年は流氷の見える期間が減少傾向にあります。北海道まで流氷を見に行くのは難しい方も、簡単に見る方法はありません。気象衛星ひまわりによる衛星画像で流氷の様子を見ることができます。図は2021年3月3日の衛星画像ですが、オホーツク海が流氷に覆われている様子が白くなって映っています。この日は日本付近は高気圧に覆われたため、さえぎる雲がほとんどなく、海水がよく見えています。雲と流氷を見分けるコツとしては、動きの違いです。雲は時間ごとの変化が大きいです。流氷は動きが遅いため、その場にとどまっているものは流氷と判断できます。昨年12月20日に気象庁から発表された今年の1月から3月の季節予報によると北海道は、平年並みの寒さとなる見込みです。たびたび強い寒気が南下するため、例年並みに流氷を見ることができそうです。見に行かれる際は、日中でも氷点下の日も多く厳しい寒さとなります。防寒対策はしっかりとるようにしましょう。



<https://tenki.jp/> 日本気象協会 牧 良幸

- 団体会員**
- アイエスカンパニー 社団法人くらしのリサーチセンター 株式会社グリーンキャブ
  - 住友電設株式会社 大成建設株式会社 大成設備株式会社 大成有楽不動産株式会社
  - 株式会社丹青社 第一交通産業株式会社 株式会社ダイエーコンサルタンツ
  - 東海旅客鉄道株式会社 西日本鉄道株式会社 公益社団法人日本観光振興協会中部支部
  - 日本空港ビルデング株式会社 広島電鉄株式会社

**編集後記:** 令和5年(2023)、コロナによる罹患者は減少せず、ウィズ・コロナ(コロナとの生活)を余儀なくされる中、太平洋側は晴天のうちに明けた。テレビの画面で初日の出を見た。富士山と雲の上に出る日の出。次には伊勢市の二見浦。さらに大分県佐伯市の豊後二見ヶ浦と。日本列島は南北に長いので、日の出時刻は東京近辺では6:50。伊勢6:59、佐伯では7:15。■1日には恒例の、「67回全日本実業団対抗駅伝競走大会」が群馬県で行われ、HONDAが昨年に続き2年連続で優勝した。2日と3日には「箱根駅伝」(第99回 東京箱根間往復大学駅伝)が行われ、下馬評通り駒沢大学が優勝し、昨年行われた「第34回出雲全日本大学選抜駅伝競走」と、「第54回全日本大学駅伝対校選手権大会」の優勝とあわせ、3冠を達成した。■終息を見せないコロナ禍にも拘らず、昨年暮れには規制が無くなり、人出が回復しつつある。昨年12月の中旬、浅草雷門へ「どら焼」を買いに行った。この「K」なる店の「どら焼」は「日本一」を謳っており、11時の開店前から行列ができる。■当協会の2代目、松尾理事長は酒を嗜まない方で、甘いお菓子が目がなく、新橋 烏森口の北、交番の先にある「B」の「大福」がお好みであった。この店で木・金曜の両日に販売される「大福」の漉し餡は絶妙。所が、「K」の「どら焼」を食べた孫の一人が「私は「どら焼」は嫌いだけど、「K」の「どら焼」は食べるよ。」とのたまった。別の孫も「B」の「大福」よりも「K」の「どら焼」の方が好いと言う。■10時に地下鉄銀座線の浅草駅を降り、階段を上った。この日の行列は、数ヶ月前よりも少し長く、人出が多くなったことを実感した。それよりも、雷門を取り囲む人、それも訪日客が多く、道路で客待ちする人力車も出掛けている。■行列の進み方が経験したことが無いほど遅い。韓国からの旅行者なのか、仕事を終わって帰国する方か、一人で「最中」を100箇所以上購入して行く。そのため、「どら焼」にするか「最中」にするかの選定、さらに箱詰めにも時間がかかり、結局2時間ばかり待つことになった。評判の店は世界中に広まる時代になって

特定非営利活動法人《NPO》

**JAPAN NOW**  
観光情報協会

東京都港区東麻布 1-27-3  
〒106-0044  
電話 03(5989)0902  
FAX 03(5989)0903  
E-mail info@japannow.org  
https://www.japannow.org/

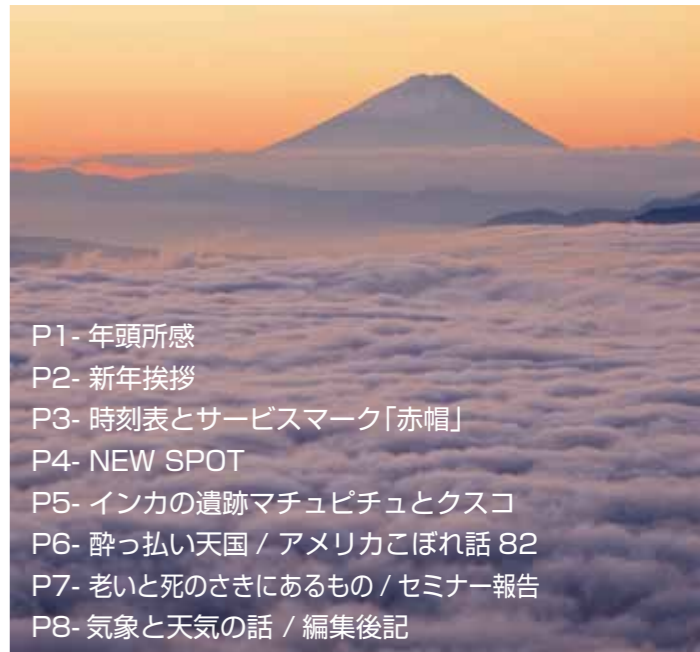
発行人：寺前 秀一  
編集長：杉 行夫  
主な配布先：会員、中央官庁、地方自治体、民間企業、マスコミなど

**年頭所感**

Japan now観光情報協会 理事長 寺前 秀一

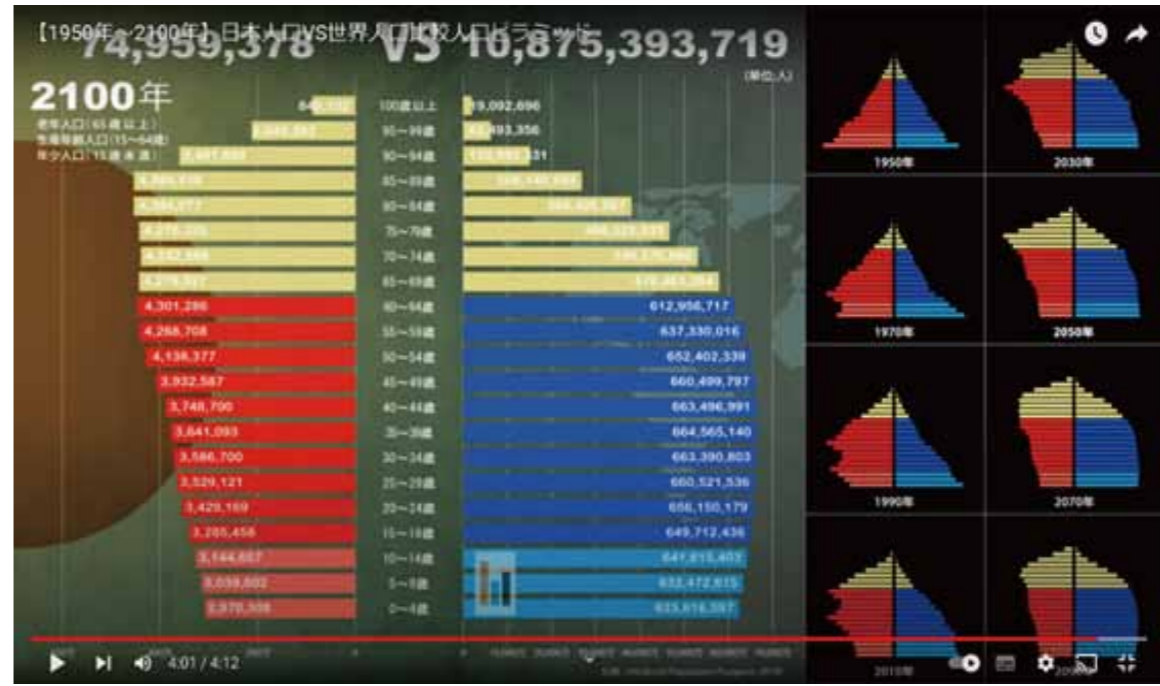
2020年から続くコロナ禍、三回目の新年を迎えるが、気持ちを新たに22世紀を予測した所感を述べてみる。2021年は新語・流行語大賞に人流が選定され、受賞者として盾を頂き、用語として人流が認知された。人流の基礎は人口にあり、人口予測はほぼ外れない。日本の少子高齢化も戦前の予測通りであった。2022年の地球人口は80億人、2100年には109億人と予測され、ベストテンにはアフリカ勢が半数をしめ日本は7500万人となる。国連の予測では、人口構造も少子高齢化現象を反映して、世界中の人口構造が等質化する。衛生管理の普及、食糧革命の恩恵に浴する結果でもある。

地球温暖化は地軸や太陽活動の変化による影響が大きく、百年程度では変化はないが、AIの進展は間違いなく起きる。観光は「楽しみ」のための移動とされる。「楽しみ」とは脳中現象であるから、AIと脳機能の解明の進展により、22世紀には移動によらなくても効果が獲得できるようになる。80年前の1940年を思い起こせば22世紀は想像を超える。中世以来の旅の最大の障害はコミュニケーションであった。現在使われているスマホ翻訳は、言語学の進展と相まって、22世紀には補聴器を超えるツールとして使われる。政治マターである国境は予測が困難だが、パスポート等の個人証明は生態認証によってかわられる。貨幣は、分散処理に基づくブロックチェーンを駆使したものに変わる。自動運転車や自動運転船、



- P1- 年頭所感
- P2- 新年挨拶
- P3- 時刻表とサービスマーク「赤帽」
- P4- NEW SPOT
- P5- インカの遺跡マチュピチュとクスコ
- P6- 酔っ払い天国 / アメリカこぼれ話 82
- P7- 老いと死のさきにあるもの / セミナー報告
- P8- 気象と天気の話 / 編集後記

機は単なる移動用具ではなく、周りの空間ごと移動させるものに概念化する。Appleの考えている自動運転車は窓を廃止し車窓からはヴァーチャル空間を映し出すそうであるが、車というよりも空間が自動的に移動するというものに概念が変化する(https://youtu.be/2sElZ7yO14)。そうすると、どこに移動するかよりも、だれと移動するか、誰と一緒にいるかが重要となる。親子、夫婦と一緒にいるところが住所であり家庭と認識される。観光概念は希薄になり、家族や恋人と移動することが重要となる。観光よりVFR (Visit Friends & Relatives) が注目される。AIと脳処理の解明の進展で、現実



の観光空間で得られる程度の「たのしみ」は、仮想空間で十分に得られる。今、メタバースが盛んに話題にされる所以である(https://youtu.be/9wD6PYpA-oE)。さらに、月や火星探索には必須とされる3Dプリンター技術は、日常生活にも応用され、人の移動のみならずモノの移動にも大きな変化をもたらすのである。

## 新年挨拶

国際世界観光機関駐日事務所代表 本保 芳明

明けましておめでとうございます。昨年は、ようやく水際規制が緩和され、インバウンド再開の手ごたえがあり、また、全国旅行支援などにより堅調な国内需要を実感することができ、良い形で終えることができました。こうして、長い新型コロナ禍の苦境を脱しつつあることは、ご同慶の至りであります。

この朗報とともに深刻さが明らかになったのが人手不足です。観光のみならず多くの産業が直面する問題であり、国際的にも観光産業の重大懸念事項となっています。少子高齢化の進展、働き方改革の浸透、外国人労働者の急減といった一般情勢に加えて、給与水準、労働環境等観光産業の魅力不足が問われているところです。観光立国を唱え、一定の成果を上げながら、観光産業が魅力ある業種に転換しえていないことは誠に残念です。しかし、最終的には人にプロダクツの質を全面的に依存する観光産業は、産業全体としては永遠に人手不足なのかもしれません。問題解決は個別企業レベルにあり、魅力ある企業が、より良い労働環境を提供して、優秀な人材を集め、結果として高品質なサービス提供に成功して、勝ち組となって行くというプロセスの中で、全体のレベル向上が実現して行く他ないかもしれません。

何れにしても、観光復活の中で、多くの企業が、魅力的な企業に変革し、働きやすい職場づくりに成功し、持続可能な観光に取り組むことによって、観光立国が一步でも前進することを夢見て、新年のご挨拶とさせていただきます。

## 今年を「産業観光」の年に

～年頭にあって～ JR東海顧問 須田 寛

謹賀新年 明けゆく年のはじめにあたり皆様方の益々のご発展ご健勝を祈念申し上げます。

コロナ禍で大打撃を受けた「観光」もようやく復活への動きが目立ってきた。しかしコロナ禍再来への警戒が求められており当分ウィズコロナの時期が続くと考えられる。このような時に当たり新しい年の「観光」はこれまでの延長線上の「観光」の復活ではなく、一歩進んだ「新しい観光」を展開したいものと思う。筆者は今年こそ「産業観光」の年にしたいと考えている。コロナ禍で経済活動全体が沈滞その復興が期待されており、「経済大国」の日本では経済活動の再活性化就中ものづくり産業の再活性化が期待されている。そのためには日本の「ものづくり」の特性とその実態を多くの人が実地に見学ないし体験を通じて自らのものとすると共に海外諸国の人々にも秀れた日本の「ものづくり」に接して貰うべく「産業観光」の推進こそまさに急務であると思う。そして「ものづくり」日本の応援団(?)を国の内外につくりたいものである。

「産業観光」が今年の日本の「観光」の目標となるべき理由はまず日本の「ものづくり」への内外の理解を深めるためである。そしてウィズコロナの時代に求められる「密」のない「観光」であること、また今世界が取り組んでいる持続的な住みよい世界構築に向っての「SDGs」活動そのものであることにもあると思う。「密のない観光」とは「産業観光」は操業中の工場工房等の見学、体験が中心となるがその性格上安全かつ効果的な「観光」とするため

旅行ジャーナリスト 沓掛 博光

めでたさも 中くらいなり おらが春(一茶)。

コロナ禍の新年をこんな気持ちで迎えた方も多いのではないだろうか。感染の終息が見えぬ中、観光関係者にとっては拭い去れぬ不安を常に抱いての3年間であったが、そうした厳しい状況下において、新しい観光の試みが各地で生まれてきたのは、闇の中に差し込み始めた光明とも言える。現代社会における基本的な暮らしのツールとなったネット環境を活かしたオンラインツアーの実施やワーケーションという新たな働き方あるいは旅先での過ごし方への提案など“禍を転じて福となす”ではないが未曾有の厄災から新しい観光が生まれてきている。

オンラインツアーでは、私が連載している朝日新聞社の言論サイト「論座」で取り上げたところ、旅に行きたくても中々行けない高齢者や身体が不自由の方々から憧れの地を旅する楽しみを知ったといった声や教育旅行の事前学習に最適などの予想を超える反響を頂いた。ワーケーションではオフィス以外の場で仕事とバケーションを一体化した新たな働き方の出現や観光とは無縁の地域で来訪者との交流が生まれ、にぎわいや地域振興が図られるといった事例を生んでいる。また、一方では昨今注目されている絶景やインスタ映えの観光をさらに推し進めた美しい風景を生み出す自然をより深く理解し、後世につなげていくSDGsの考えを取り入れた新しい視点の観光も生まれている。例えば群馬県みなかみ町では利根川の水源である立地を生かして水をテーマにしたウオーターツーリズムを実施し、好評を得ている。20世紀末から国連を始めとする国際機関等で観光が持続可能な開発の機能を有することが広く認識されてきたところだが、コロナ禍で始動した2023年においてもこうした幅広く、奥の深い観光の真価が益々期待され、発揮されるものと思われる。

少人数ずつの分散観光が中心となることによる。(とくに修学旅行に普及してきた、目的地でのグループ別分散学習には最適の観光)又「SDGs」(持続可能なゆとりある社会構築のための世界共通の目標)達成のためには観光就中「産業観光」の果たす役割が極めて大きい。17の目標へのアクセスは「産業観光」が効果的役割を果たすことは別表に示す通りである(日本には何も「ものづくり」のない地域はほとんど存在しない)。

一～三次産業中何らかの「ものづくり」が国内各所で進められている。そこに観光客を誘致するため必要なのは適切なストーリーにもとづく情報の発信が必要である。その情報によって幅広い国際「産業観光」も実現(現に近隣諸国の人々が日本の「産業観光」に多数訪れている)する。今年の「観光」はこのような状況から「産業観光」を中心に取組むべきことを提案させていただきたい。そしてそのカギを握るのはまず着地(目的地)からの適確な情報発信ではないかと考えられる。

- 「SDGs」と「産業観光」の結びつき(例示)
- ⑧働きがいも経済成長も(ものづくりがその原点)
  - ⑨産業と技術革新の基盤を作ろう(産業観光の人材育成効果を活かす)
  - ⑪住み続けられるまちづくりを(まちづくりは産業観光から)
  - ⑫作る責任 つかう責任(産業観光から体得できる)
  - ⑬気候変動に具体的な対策(排ガス規制 自然エネルギー活用策を学ぶ)
  - ⑭海の豊かさを守ろう
  - ⑮陸の豊かさを守ろう
  - ⑯パートナーシップで目標を達成しよう(観光客と観光地住民の協働)
- ※注：( )内は筆者による補足説明、○をSDGsゴール番号

## 「老いと死」その先にあるもの

小田急電鉄(株)特別社友 利光 國夫

私は昨年3月に84歳になったが、昨年ほどつづく「老いと死」を実感したことはない。とにかく病に明け病に暮れる1年であった。年初から体調不良が続き「過敏性腸症候群」と診断された。2月にはコロナに罹り10日間の自宅療養をしているうちに持病の腰痛が悪化して足腰がすっかり弱ってしまい、趣味のゴルフもままならない始末となってしまった。

そうこうしているうちに以前からあった顔面のほくろから出血するようになり皮膚がんの手術を受けた知人のアドバイスをあてて専門医の診断をうけたところ、即座に「基底細胞癌」と判定されてしまった。

7月に2泊3日の入院手術を受け退院したのだが、その前後から胸やけと胃痛が始まり収まる気配がない。たまりかねて胃カメラ検査を受けたところ腫瘍が見つかり、これは十中八九胃がんに違いなかならうと覚悟した。ところが幸いにも胃がんではなく、「逆流性食道炎」という診断だった。

胃がんでなかったのは良かったのだが、この「逆流性食道

炎」というのが難物で夜中に寝ていても苦しくて起きてしまう。結局のところ軽快するのに4か月かかってしまった。この間持病の腰痛が再発して外出もままならない有り様で年末を迎える次第となった。

思えば一昨年夏までは週に2回はゴルフを楽しむなど元氣だったことが嘘のようで、「老い」というものはある日突然やってくるものだということを実感している。こうなると次に控えているのは「死」である。

昨年は多くの友人知人の訃報に接したが、平均寿命を超えた身としては当然のことかもしれない。

いま私が大きな関心を持っているのは「死」の先にあるのは何か、あるいは何もないのかということである。靈魂というのはあるのか、死後の世界、いわゆる「あの世」というのは存在するのか、これは最大の謎であろう。古今東西あらゆる宗教が説いているのは人間にとって「死」は終わりではないということであるが、こればかりはいま生きている我々には絶対に解決できない命題であろう。いずれそれがわかるとすると、「死」もまた自分にとって大きな意味があるというべきであろうか。

## 観光立国セミナー 第176回 12月6日 会場:MFPR渋谷ビル4階

### 「ロシアの多様な文化を旅する」

筑波大学名誉教授 中村 逸郎

ロシアは、モスクワが中心だと思いがちです。しかし、ロシアの地図をよく見ると、広大なシベリアが国土の3分の2を占めています。そこは豊富な天然資源、たとえば天然ガスやダイヤモンド、さらに石炭の採掘地です。でもそれだけではなく、驚くことに140に及ぶ多様な諸民族が生活しています。イスラム教徒のタタール人はロシア総人口の13パーセントを占めており、そのほかに仏教徒のトヴァー人、さらに300人ほどを残す少数民族トファー人なども暮らしています。彼らの大多数はロシア人がウラル山脈を越えてシベリアに本格的に入植する16世後半まえからの先住民です。

民族とはいえませんが、南シベリアの山岳地帯には「世捨て人」が何度も目撃されています。わたしがいる村人に話を聞くと、「彼らは何十年も他人と接していないので言語を失い、唸り声をあげるだけ」という。世俗社会から逃亡した理由は不明らしい。

ここでは、わたしがもっとも印象に残っているシベリア極北に住むネネツ人の日常生活を紹介します。アメリカの社会学者は世界各地の7人と繋がれば、たとえインターネットが届かない未知の人たちとさえも出会うことができると記しています。わたしはロシア国内の友人、そしてこれらの知人たちを伝って、ネネツ人の家族が住むチューム(トナカイの皮で覆う移動式住居)にたどり着くことができました。10代後半に見える男の子はわたしに、「ツンド



ラ(永久凍土)とトナカイは、ぼくの人生のすべてであり、幸せです」と笑顔満面で誇った。

わたしが訪問したのは8年前の1月中旬で、太陽が出るのは日中の1時間ほどで、気温は零下40度。地平線の彼方までツンドラが広がっていました。ネネツ人は大昔から、トナカイの原始的な遊牧生活を営んでいます。主人のニコライさんが不思議な話を語ってくれました。「家族の一人ひとりは、自分のトナカイを200頭のなかから見分けることができます。一頭ごとに体の模様が異なり、性格も違います。群れに近づくと、トナカイのほうから自分の主人に近づいてきます」。わたしには、どのトナカイも同じに見えるのですが・・・。

ニコライさんの家族はカレンダーや時計を持たず、自分の誕生日も正確な年齢も知りません。ネネツ語には書き言葉がないので、自分たちの歴史もよく知りません。さらにシベリア極北には、ロシア政府が住所を設けていません。だからロシア領土に住みながらも、住民登録していないので、「ロシア国民」と認定されていません。わたしが日本から持参した鏡を見て、ニコライさんの家族たちは鏡に映る自分の顔を見て、歓声あげていました。

# 「幕末通訳 ジョン万次郎とジョセフ彦」



ジョン万次郎

元 JTB 取締役 北村 嵩

ジョン万次郎とジョセフ彦は、共に江戸時代末期の船乗りで、乗船していた船が嵐で遭難、漂流し、アメリカの船に救助された。その後、親切なアメリカ人、ジョンは船長、ジョセフは税関長に認められて、米国の彼らの故郷で教育を受け、仕事に従事した。

万次郎は日本への帰国の費用を捻出する為、当時金鉱が発見され一大ブームとなったカリフォルニアへ出向き、600ドル相当の金を手に入れ 1852 年に沖縄、薩摩経由で故郷土佐に帰国した。(詳細は JN 紙 77 号・2011 年 5 月号掲載の「ジョン万次郎はゴールドラシャー」を参照)

一方、彦蔵は税関長夫人の勧めでカトリックの洗礼を受けた。後にキリシタン禁教の日本には入国出来ない可能性を考え、米国へ帰化し米国籍を取得した。日本への入国のためハワイ経由で香港に滞在していた時、初代駐日公使になるハリスに会う。その英語力を買われて米国神奈川領事館の通訳に採用され 1859 年に帰国し、着任した。(JN 紙 23 号・2013 年 1 月号「3 人のアメリカ大統領にあった江戸時代の日本人」参照)

1858 年に日米修好通商条約が締結され、日本は開国した。この前後から外交交渉を進めるために、日米両国語に堪能な通訳が日米両国ともに必要であった。当時は外国との交渉はすべて日本流の古い医学書から学んだオランダ語で行われ、米英仏の外交官でさえ理解が難しく、日本語と英語を直結出来

る人材が求められていた。

幕府は、土佐藩で藩校の教授をしていた万次郎を幕府直参として召し抱えた。英語を話せる唯一の日本人として大切にされたが、米国側に通じる危険性のある人物として警戒され、交渉や打ち合わせの場に出ることを許されず、彼の英語のみならず航海術、測量術の知識は十分活用されなかった。一方、彦蔵は米領事館員としての仕事の他、ロシアなど他国の通訳を手伝い、国際的な幕末外交の第一線の通訳として活躍した。しかし 1860 年に漂流仲間英国公使館の傭人であった岩吉が攘夷浪人に殺害された。当時は攘夷熱が吹き荒れ、外国人や外国機関と仕事をする日本人が沢山襲われて殺されていた。彼は自分の微妙な立場に恐怖を覚え、又、当時の米領事との関係もうまくいかず退職しようと決意していた。が、その直後、日米修好通商条約の批准書交換のための遣米使節団、団長新見豊前守以下 74 名が米軍艦ポータハン号と随行する咸臨丸で出港することになった。彦蔵は米通訳として咸臨丸に挨拶に行った。その時艦長勝麟太郎や福沢諭吉と共に中浜万次郎を初めて紹介された。万次郎も彦蔵もお互いのことは聞き知っていて、彦蔵より 9 歳年上で 34 歳の万次郎が「お互い漂流民として苦労したがお国のために働きましょう」と言い握手した。



ジョセフ彦 (浜田彦蔵)

明治に入り、万次郎は欧州視察団に参加したが帰国後病に倒れ、以後静かに暮らし明治 31 年に生涯を終えた。彦蔵は 1861 年に 3 度目の渡米をし、リンカーン大統領と会見した。帰国後海外新聞を発行し、日本の新聞王と言われる。その後日本で様々な活動をし、明治 30 年に死去した。

摘されてきた。結果的に旧ソ連時代末期は経済危機に陥った。そこで政権の座に就いたロシア人にしては珍しく酒嫌いのゴルバチョフ書記長は、病院や婦人団体から飲酒の害悪の訴えを受け、直ちに節酒令を発した。禁酒令を出しては、ロシア人を狂乱に陥らせると考え、それは避けたのである。だが、これによって多くのロシア人の離婚件数が増加したというオチまでついた。「ウン十年ぶりにシラフで女房の顔を見てショックを受けたロシア人が多かった」からとの小喃まで流行したほどである。そうかと思うと一部のウオッカ好きのロシア人は、こんな節酒令程度ではへこたれなかった。こっそり密造ウオッカの製造を各地で始めた。しかし、節酒令により酒を飲む機会が減って労働者がやる気を失くし、経済活動が停滞した。旧ソ連崩壊とともに酒嫌いのゴルバチョフ政権も運命を共にしたとの皮肉まで言われた。その座を受け継いだのが、ウオッカ大好き人間として知られたエルツィンである。泥酔して橋から川へ落ちたエピソードまである酒好きのエルツィンは、新生ロシア連邦初代大統領に就任して、早速節酒令を廃止した。酒好きでなければ、大統領には適さないというロシアのお国柄は、多くの酔っ払いによって支えられている。酔っ払い天国は、国の歴史もふらついてはいまいか。ウクライナ侵攻もウオッカのせいだろうか。エッセイスト 近藤 節夫

## 時刻表にみる駅のサービスマーク③

「赤帽」「弁」 JR 東海顧問 須田 寛

「赤帽」とは駅に在勤して乗客の手回品を運搬(有料)する構内営業者のことで現在は存在しない職種です。昔は長途の鉄道旅行をする人々は多くの手回品(旅行に必要な身の回りの品等)やそれを収納した大型トランクなどを持って乗車するのが普通でした。

従って駅のながいホームを歩いたり階段のある大きい駅では乗客の手回品を駅内で運ぶ(乗客に同行して)人が求められることが多かったのです(とくに老人子供連れの場合)。しかも戦前は幹線の殆どどの列車には 2 等車(現グリーン車)が連結されていましたがこれらの連結位置は編成の最前または最後部(東海道線上りでは神戸寄りの最後尾)が多く手回品の多い 2 等客は乗降の際「赤帽」を利用するのが普通でした。このため急行停車駅はほとんど全駅に赤帽がおり東京駅では最盛時(昭和 10 年代前期)数十人の「赤帽」が在籍していました。常連客は特定の「赤帽」を指名しチップをはずむ人も多かったと聞きます。従って「赤帽」いる駅かどうかは当時の乗客にとって大きい関心事です。時刻表のこのマークは携行荷物の大きさを決める際にも必要な重要な情報だったのでした。

戦時中の人手不足でほとんどの駅の「赤帽」が廃止された時も船車連絡駅や特急停車駅クラスの駅の「赤帽」は残っていたほどです。戦後も急行停車駅を中心に急速に復活しました。しかし旅行慣行が変わって大きい荷物を携行する人が減少したこと、又経済高度成長の波を受けて単純労働の職場は再び人手不足となり、就業者が減ったことそして赤帽にとって致命的だったのはトランクなどにキャスターがついて重量感なく持運びができるようになったことでした。

さらに架橋、トンネルなどで四大島が直結され乗客の多い船車連絡駅がなくなったことが「赤帽」絶滅の決定的要因となりました。明治 29 年山陽鉄道の駅で始まった「赤帽」も昭和時代と運命を共にするかたちで、平成期に入ると間もなく急速な需要減で遂に一世紀にわたるその歴史を閉じました。旅情緒がひとつ失われたと惜む声も各地にあったようですが…

(注) 図は東海道線京都米原間の昭和 15 年当時の時刻表です。急行停車駅でもない中間駅の「能登川」に赤帽マークがついています。これは同駅最寄りに「近江商人」のふるさととして有名な五箇荘町がありそこにある留守宅に帰省する裕福な人のなかに乗降の都度、赤帽を利用する人が多かったからだそうです。同駅の乗客のなかにはなじみの赤帽に事前に列車を連絡する等して指名していた人も多かった由です。



赤帽制服 帽子  
昭和後期から平成 13 年まで東京駅で赤帽を務めていた人の制服所蔵館 江戸東京博物館  
写真：東京都立博物館・美術館  
収蔵品検索サイトより

### 京都米原間時刻表 2

「誤記の訂正」

JAPAN NOW 紙 145 号掲載の「時刻表にみるサービスマーク 弁」の記事の最終行に「このマークは必要性もなくなったために時刻表から見られなくなりました」という記述があります。弁マークが各駅や周辺の食事施設などが充実してきたことで必要性が薄らいだこと、又駅内や駅周辺に弁当販売店がある場合に駅に「弁」マークを特につけるかどうかの判断が難しいこと、又このマークは本来車窓から弁当購入ができるかどうかを示すものでしたが、車窓からの弁当購入がなくなっていること等々も事情変化が目立つようになりました。従って「このマークを外す駅が増えてマークの今後のあり方を再考する必要にせまられています」と書くべきところを「みられなくなりました」と誤記してしまいました。

お詫びと共に訂正させていただきます。

## 満蒙・はなももの里



長野県阿智村にある民営「満蒙開拓平和記念館」

満蒙——北海道より北にある厳寒の中国北東部に、かつて13年間だけ存在した幻の国・満州と、内蒙古の一角を指すこの地へ、入植者として満蒙開拓団が日本全国から送り込まれた。1931年の満州事変後、貧困に苦しむ農民の救済などを名目に国策で食糧増産と北方警備などの役目を担わされた。総勢27万人とも32万人とも言われ、45年8月9日突然のソ連軍侵攻で広野を逃げ惑い、日本軍に置き去りにされ逃避行は悲惨を極めた。敗戦時に旧満州にいた日本人約155万人のうち死者約20万人の4割は開拓団員だったという。

阿智村月川温泉・はなももの里

満蒙開拓の歴史を風化させず「戦争に導かれた道筋を学び、平和な社会とは何か」、後世に伝える拠点施設が求められている。財政難もあり



昼神温泉のハナモモ



半世紀以上も経った2013年4月「満蒙開拓平和記念館」(現・寺沢秀文館長)がようやく南信州・飯田市近郊の阿智村に開館した。開拓団は長野県出身が1割強で最も多いことなどから村が役場近くの用地を無償提供した。入館料や寄付などで運営する民間施設だ。満蒙開拓経験者の証言を声と映像で伝え、開拓団の住まいを再現し、開拓の様子や青年義勇軍、敗戦、逃避行などのスケッチや資料を展示する。来場者の感想掲示も心を打つ。アクセスはJR飯田から路線バスで約30分、阿智村の「こまんば」下車徒歩10分。東京・新宿から飯田まで4時間強の直通バスもあるが、ローカル鉄道のんびり旅で満蒙の往時を偲びながら訪ねるのもお勧めだ。往路をJR中央本線、飯田線経由で飯田まで5時間強、復路は飯田線から豊橋経由の東海道新幹線にして東京まで4時間強かかる。

雪渓が残る中央アルプス国立公園の富士見台高原頂上付近



高原ゴンドラ付近の「水芭蕉の小径」

山間深い阿智村は自然豊かな環境で「花桃と星空といで湯の郷」とうたう人気の観光地だ。ハナモモは観賞用に品種改良された桃の花で江戸時代に生まれ、大正に実業家・福沢桃介(論吉の娘婿)がドイツから苗木3本を持ち帰ったとの言い伝えもある。4月中旬～5月上旬に開花し桜からハナモモへ長期間、約5千本の赤、白、ピンク3色が咲き誇る桃源郷だ。これまで環境省が全国で実施した「星空継続観察」で最も星の観測に適した漆黒の夜空と認められ「日本一星空がきれいな村」とも言う。「天空の楽園ナイトツアー」が冬季も含み連日(一部期間を除く)開かれ、街の光が届かない「ヘブンスそのはら」の高原にゴンドラで登ると無数の星々が手に取るように天空いっぱい光り輝く。晴天率は約60%。雨天曇天で星空が見えない日はガイドによる星の話やスクリーン映写などで学びの時間を過ごす。ここから岐阜県境の富士見台高原は起伏ならかなウォーキングに適したコースで標高1739mの頂上は360度の眺望が開ける。森林セラピーロードなども整備され、晩秋は早朝に南アルプスを背景に美しい雲海が広がる。山麓の「はなももの里」美しい月(げつ)川(せん)と、朝市で毎日賑わう昼(ひる)神(がみ)は比較的新しい温泉地だが湯量豊かで家族連れも多いつつろぎの里だ。

写真・文 林 莊祐

写真はいずれも2022年4月19～21日写す

エッセイスト 近藤 節夫



機上から見下ろすクスコの街

マチュピチュの旅は、古都クスコに始まりクスコに終わる。15世紀のインカ帝国の遺跡である世界複合遺産マチュピチュは、1911年に発見されるまで廃墟だった。現在マチュピチュへの玄関口は、世界文化遺産のクスコである。海拔150mの首都リマから一足飛びに空路到着したクスコは、3,400mの高地にあり、やや空気が薄くホテルには、酸素吸入器が備えられている。このクスコはかつてインカ帝国の首都だった。今日も魅力的な史跡の街として外国から多くの観光客が訪れる。インカ時代には国のあらゆる儀式が行われ、街の中心・アルマス広場は地方への起点ともなっていた。郊外へ足を延ばせばアルパカの姿も見られる。広場へ向かう道路の左右に大きな石を積んだ壁は、インカ皇帝の宮殿跡で精緻で重厚な石組みが今日では宗教美術博物館の礎石になっており、インカ文明の歴史の重みを感じさせてくれる。



アルマス広場と集落を結ぶ窮屈な路地

このクスコからペルーレールに乗車して、3時間で海拔2,280mのマチュピチュ駅まで来ると、つい登ってきたような錯覚に陥るが、意外にもクスコから列車はマチュピチュへ向けて1000m以上も下って来たのである。ここは温泉の出ることで知られるが、ここマチュピチュ村の初代村長は、何



マチュピチュへの途中駅

と福島県出身の日本人野内与吉だった。途中車窓から眺める牧歌的な景色は、物売りに立ち寄る民族衣装をまとった女たちの立ち居振る舞いととも興味を惹かれる。

マチュピチュ駅からバスでつづら折りを上り切った地点からしばらく歩くと、「最も訪れてみたい世界遺産」として人気のマチュピチュの幻想的な遺跡が忽然と目の前に現れる。

正に「空中都市」の面目躍如である。遺跡は神殿と住民の居住区に分かれて、その下の斜面には段々畑の棚田の跡が整然と残されている。石で積まれた建造物は、一分の隙もなくその精密さは、数百年が経った今日でも当時の精密な技術を偲ばせてくれる。上空をコンドルのつがい飛び去ることもあり、大きなロマンを感じさせてくれる。



マチュピチュ

山中の断崖のような高地にどうしてこのような要塞都市が建設されたのか、アンデス文明が独自の文字を持たなかったため今も謎である。明らかに高度な文明により繁栄したマチュピチュでインカの人々が、僅か80年ほどしか生活せず放置して、奥地へ移り住んだことももう一つの謎とされている。帰りの駅までのバスの旅がこれまた無邪気に楽しい。バス



クスコ郊外のインカ宮殿跡

は樹木の間を通り抜け、急坂を蛇行して下る。カーブでスピードを落とす都度物売り少年が外からバスの乗客に声をかける。よく見るとさっき物売りしていた少年ではないか。バスは13のヘアピンカーブをジグザグで下るが、物売り少年らはバスが通り去るや否や真っすぐ走って下り、先にバスを待ち受けているのだ。これを何度もやっているのだから、乗客ともすっかり顔なじみとなり、挙句には少年たちからお土産品を買わされる羽目になる。



駅でへたり込む物売りのおばちゃん